

今年の吾の正月三が日はコタツの中での読書週間であった。

子供の時の愛読書は「日本文学全集」が第一である。これ等は現在でも吾の愛読書である。比喩談としてこれほどの全集は、最近には一つもないであろうと思う。

名高いWeb上の「青空文庫」なども到底この「日本文学全集」の敵ではない。それから「漱石全集」も愛読書の一つである。これも今以て愛読している。一時は「漱石全集」の全てを一心に読破していたことがある。その時分では江戸川乱歩氏の少年探偵団や何かよりもこの「坊ちゃん」だの「我輩は猫である」だのといふ方が遥かに僕には面白かった。

社会人になって通勤や出張の電車の中で、西村京太郎の「十津川警部シリーズ」や内田康夫の「浅見光彦シリーズ」や和久峻三の「赤かぶ検事シリーズ」を愛読した。同時に、池波正太郎の「剣客商売」や司馬遼太郎の「坂の上の雲」や海音寺潮五郎のお「天と地と」を愛読した。だから人の事は笑えない。吾には「ロシア文学」にあるような「トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフ」時代は皆無であり、西洋文学を読んでもコナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」やヴィクトル・ユーゴーの「レ・ミゼラブル」のような肩の凝らない小説だけであった。

定年を迎えてから色々な本を読んでいるけれども、特に愛読書というものは無い。概して云うと、昔読んだ推理小説とか歴史小説とかいうような肩が凝らない小説が好きである。それは吾の気質からも来ているであろうけれども、一つは確かに西洋の哲学的な長編小説の取っ付きにくいものへの反動であろうと思う。ところが、定年を迎える前後から、どういふものか趣味や物の見方に大きな曲折が起って、前に言った「青空文庫」の中から明治・大正の文豪が書いたエッセイを読み、更にその作家のものが読みたくなった。夏目漱石や森鷗外などに傾倒し、漱石全集を読み返したり、ケーブル・テレビで流す日本映画などを見るようになったのはこの頃からである。現在の吾の心持からいうと、夏目漱石の弟子を自認している芥川龍之介や寺田寅彦の小説もすべて興味対象のように感じられる。これは夏目漱石の「イズムの功過」をはじめ、芥川龍之介の「イズムと云ふ語の意味次第」や寺田寅彦「鸚鵡のイズム」を読んだ影響であったらうと思う。

そういう心持が今でも続いているが、段々読んでいるだけでは物足りなく、一年前から真似をしてエッセイを書くことに心が惹かれるようになってきている。但、エッセイを書くと言っても力のないものをただ書いても余り満足がいかない。夏目漱石や芥川龍之介や寺田寅彦のエッセイはこの点で吾には面白くもあり、又参考になるものである。



<参照> 芥川龍之介「愛読書の印象」